

令和 6 年 5 月 1 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00090

研究課題名(和文) 宣教師資料に見る「満洲国」：植民地状況下におけるキリスト教伝道

研究課題名(英文) "Manchukuo" in Missionary Archives: Christian Missions under Colonial Conditions

研究代表者

渡辺 祐子 (Watanabe, Yuko)

明治学院大学・教養教育センター・教授

研究者番号：20440183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、満洲(中国東北部)で展開されていたキリスト教伝道、医療、教育等のキリスト教諸事業が「満洲国」成立後どのような状況に置かれたのかを、宣教師資料を用いて明らかにすることであった。満洲伝道の資料を豊富に所蔵するスコットランド国立図書館での資料収集・調査は、コロナ禍によって延期せざるを得なくなったが、その間すでに収集済みの資料を用いて、これまで関心が払われてこなかった神社参拝問題や、日本人牧師の指導の行われた教会合同の背景を明らかにすることができた。またコロナ禍を経た2023年度にスコットランド図書館での資料調査を実現させることができ、これまでの研究を進展させる貴重な資料を発掘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1941年6月に日本のプロテスタント諸教派が合同し設立された日本基督教団にならって「満洲国」でも日本人牧師の指導によって中国人教会の合同が断行され満洲基督教会が設立されたが、中国人が合同の過程をどのように見ていたのかは、宣教師の報告に依拠するしか方法がない。宣教師資料を用いて宣教師の視点を加えつつ、教会合同の経緯を明らかにするものとして本研究の意義は小さくない。同様に神社参拝問題も、植民地期朝鮮や台湾と異なって研究の蓄積が極端に少ない「満洲国」の状況を解明する点に本研究の学術的、社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to clarify how Christian missionary, educational and other enterprises were carried out in Manchukuo under the colonial situation by using missionary materials.

Although the research work at the National Library of Scotland, which has a large archive of Manchurian missions, had to be postponed by the Covid-19 pandemic, I was able to analyse other related materials and consider the background to the shrine worship imposed on the people, including Christians, by the Manchukuo government and the unification of the Chinese churches led by the Japanese pastors.

And last year I was finally able to fly to Edinburgh to collect missionary archives in the library.

研究分野：中国キリスト教史

キーワード：キリスト教史 中国近現代史 「満洲国」研究

1. 研究開始当初の背景

旧満洲国(現中国東北地方、以下「満洲国」と表記)をめぐるのは、植民地研究、越境文学研究、移民研究、難民研究等々、実に多くの視点からの膨大な研究がある。こうした幅広い「満洲国」研究の諸テーマのうち、「満洲国」の宗教については、満鉄調査部が優れた研究を残しているほか、1980年代以降、建国神廟等の神社研究や、「満洲国」の佛教と植民地支配との関係を論じた研究が発表されているが、こうした中でキリスト教については、未だ十分な考察が行き届いていない。

「満洲国」期をも含む中国東北部のキリスト教諸事業全般を最もよく論じているのは、かつて満洲および「満洲国」でキリスト教伝道に従事していた元アイルランド長老教会宣教師 Austin Fulton の詳細な回顧録だが、当然のことながら日本(「満洲国」)側の資料は全く用いていない。

他方、日本における研究としては、申請者自身も執筆者の一人である「満洲国」熱河省におけるキリスト教伝道にかんする著作を挙げることができる。該書はこれまで純粹無垢な信仰者として礼賛されていた日本人伝道者を客観的に論じた画期性を持つものだったが、「満洲国」における日本人牧師と宣教師、中国人牧師との関係を支配する側とされる側とに単純化してとらえているという課題が残されていた。

中国大陸では、華中師範大学(武漢)の徐炳三が、「満洲国」の支配に日本の教会がいかに協力したのかという関心から優れた著作を出しているが、徐の関心は「満洲国」がキリスト教を用いていかなる支配をおこなったかにあり、従来の枠組みを踏襲するもので、しかも宣教師アーカイブや日本側の資料を縦横に用いるには至っていない。

いずれの研究も植民地支配に協力した日本人宣教師と抑圧された中国の教会という構造を最初に指定し、複雑な利害関係や人間関係を捨象するという問題を抱えている。

2. 研究の目的

宣教師資料を用いた研究には「伝道の歴史」を跡付けることが目指される場合が多いが、本研究は彼らの目に映っていた「満洲国」の姿にも大きな関心を向けるものである。従って本研究の目的は、「満洲国」におけるキリスト教事業の全体像を明らかにすることと並んで、「満洲国」によるキリスト教事業に対する統制と動員に対し、キリスト教教会側がどのように応じたのかを、当局との交渉、当局に対する抵抗、当局の要求に対する妥協という多様な側面から解明し、植民地状況下の実態を明らかにすることである。

本研究が「満洲国」のキリスト教伝道を中心に担ったスコットランド教会、アイルランド長老教会の資料を用いる意味は大きくふたつある。一点目は、1870年代から中国東北部伝道に最も早く着手し、東北部最大の信徒数を擁し、多くのキリスト教学校を設立した両教会の資料を用いなければ、キリスト教伝道の詳細な実態を把握することはほぼ不可能であるということ、二点目は、同資料がキリスト教に関連する事柄だけでなく、「満洲国」成立以後の政治、社会の変化や、当局の統治システムの特徴、植民地朝鮮との比較などの情報を豊富に含んでいることである。

本研究は、これまで十分に用いられてこなかったこれらの資料を駆使して、植民地支配の暴力性と抑圧性を踏まえつつも、宣教師という第三者の視点を介入させ、支配-被支配の単純な構造におさまらない統治の多層性、多面性を明らかにすることを目指す。解明すべき具体的なテーマは以下のとおりである。

1935年中国人キリスト者一斉検挙に関する研究

上述の Fulton の研究により、「満洲国」当局によるキリスト教会に対する直接的な圧力は

1935年10月10日の一斉検挙が最初だったことが分かっているが、その詳細はまだ未解明である。事件の全容を明らかにし、この事件が中国人キリスト教会やキリスト教伝道にもたらした影響を考察する。

「満洲国」学制の完成とキリスト教学校法人化問題に関する研究

1937年に完成し翌年から施行される「満洲国」の学制の完成がキリスト教学校にその存続に関わる大きな影響を与えたことはほとんど論じられていない。学制施行に伴いキリスト教学校に何が起きたのかを解明する。

「満洲国」における神社参拝強制について

神社参拝強制については若干のオーラル・ヒストリー研究があるものの、キリスト教学校にかんする研究はほとんど見当たらない。それはなぜなのかという問いから出発し、神社参拝強制の実態を明らかにし、外国人宣教師、中国人キリスト教指導者、日本人牧師それぞれの見方を比較検討する。

満洲基督教会設立について

1941年6月に日本のプロテスタント諸教派が合同し設立された日本基督教団にならって、「満洲国」でも日本人牧師の指導によって中国人教会の合同が断行され満洲基督教会が設立された。この諸教派合同に関する中国側の資料は実に少なく、中国人が合同の過程をどのように見ていたのかは、宣教師の報告に依拠するしか方法がない。宣教師資料によって第三者である宣教師の視点を加えつつ、教会合同の経緯を明らかにし、中国人教会、宣教師たちの認識を考察する。

3. 研究の方法

本研究はもっぱら宣教師アーカイブとそのほかの関連資料を用いて行われる。中国東北部及び「満洲国」におけるキリスト教伝道にかんする宣教師アーカイブは、スコットランド国立図書館（スコットランド教会がアーカイブを同図書館に寄贈）、アイルランド長老教会歴史協会が所蔵しており、二つの所蔵先を訪問し、資料収集にあたる。

4. 研究成果

2021年度から3年間所属組織の長を務め、研究の時間を大幅に縮小せざるを得なかったこととコロナ禍が相まって、当初の計画通りに研究を十分に進めることができなかった。しかし研究助成の延期を申請し、スコットランド国立図書館での資料調査は実現させることができた（アイルランド長老教会歴史協会での資料調査は時間的余裕がなく断念）。上にあげた個別テーマのうち と は、資料を十分に読み込むには至らなかったが、一方 と については以下の点を明らかにすることができた。

「満洲国」における神社参拝強制について

植民地朝鮮や台湾における神社参拝問題は1935年から焦点化され始めたが、「満洲国」のキリスト教学校が最初に直面したのは、神社参拝ではなく「孔子祭」(春秋に挙行)への参加だった。朝鮮、台湾で神社参拝の強制が猖獗を極めていたを知っていた在満宣教師たちは、偶像に対する拝礼を不可欠の要素とする点で「孔子祭」参列=参拝と神社参拝問題の本質が近似しているととらえ、キリスト教学校として抵抗の意思を示した。しかし参加を拒否した学校は当局の呼び出しを受け、半ば恫喝に近い説得によって学生の代表を「孔子祭」に送る苦渋の選択をした。ここまでの経緯については既発表論文で明らかにしたが、今回新たに「孔子祭」参列要請が神社参拝への要求に転換していく過程とそれに対する在満宣教師の姿勢を示す資料をいくつか発掘した。

そのうちの一つ、日米開戦前夜の「満洲国」から一足先に退避したアイルランド長老教会宣教師が退避先のヴァンクーバーから教会本部（海外伝道局）に送った報告¹についてごく簡単に記す。1939年半ばに、「孔子祭」への参列が「満洲国国民」の教化にはそれほど効果的ではないと政府が判断したことによって、キリスト教学校に対する参加要請も強制の度合いが弱まったが、「孔子祭」参列に代わる装置として導入されたのが神社参拝である。この時すでに「満洲国」の主要なキリスト教学校8校は、「満洲国」政府がすべての学校の法人化を命じたことを受けて閉校の決断を下していた。そのため朝鮮や台湾と異なり、神社参拝によって学校存続そのものが危機にさらされたケースは多くはなかった。しかし同資料は、神社参拝強制の危機が迫りつつある中、キリスト教教育が一掃された「満洲国」の教育が「野蛮で残酷な国家主義の宣伝の場 blatant and crudest nationalistic propaganda」と化していることを指摘し、同時に教会や神学校、中国人牧師に対し深刻な影響が生じ得るであることを次のように強く懸念している。「今から数か月のうちに、満洲において信仰のための死に物狂いの戦いが起きるだろう」（満洲の教会が）騙されて朝鮮の教会と同じような選択をすることになったら、ミッションはきわめて由々しい問題に直面することになる」

果たしてこの数か月後に日米開戦が勃発し、宣教師は退去を余儀なくされて、中国の教会は彼が恐れていた通りの道を歩むことになった。

「満洲基督教会」の設立について

このテーマは、2019年に発表した研究ノート『『満洲国』における教会合同について』で提示した論点の考察をさらに深めるために研究課題としたものである。注目されるのは、神社参拝要求や「満洲国」の諸教会の意向を無視した強圧的な教会合同には「満洲国」協和会が陰に陽に圧力団体として関わっていたことである。宣教師資料にある協和会に関する分析は次のように記す。「他国におけるキリスト教は満洲国の精神に全くそぐわない。したがってキリスト教は、協和会の精神に適合するよう改革されねばならない、と彼らは言う」「武藤とその仲間たちは、ある意味軍の無垢な道具に過ぎないのだろう。彼らの頭は、満洲国的ユートピアが間もなく到来するという無根拠な楽観主義と愚かな信仰で占められている。『協和会の究極の目的は、この世に地上の楽園、理想社会を築くことだ』と彼らは無邪気に言う」（武藤とは、新京日本基督教会会員だった武藤富男のことである）。

協和会は、政府の意向を先回りしてあるいはそれ以上に熱心に個々のクリスチャンの信仰の領域に介入し、教会合同を推し進めた。合同事業を実務的に担当したのは日本人牧師だが、協和会が合同推進の立役者であったことは宣教師資料から明らかである。これは、朝鮮・台湾の教会合同には見られない点で、今後日本占領期のアジア各地における教会合同を比較検討する際にも注目される論点となるだろう。

このほか、研究計画当初には想定していなかった収穫がいくつかあった。なかでも日米開戦以後の宣教師の抑留に関する資料を発掘できたことは大きい。先般、長年戦争捕虜問題に取り組んできた POW 研究会が日本国内にあった民間人抑留施設を徹底的に調査した労作『捕虜収容所・民間人抑留所事典 日本国内編』が出版されたが²、筆者が発掘した宣教師資料には、この事典の内容の更新に裨益し得る情報が含まれている。

¹ Statement from Rev. Austin Fulton, of the Irish Presbyterian Mission, Manchuria, transmitted from Vancouver on 4th March, 1941. (23B 24B 166)

² POW 研究会辞典編集委員会編『捕虜収容所・民間人抑留所事典：日本国内編』すいれん舎、2023年。

これら想定外の収穫も含めて、研究期間内に得られた成果をさらに発展させ、今後の研究につなげてゆきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渡辺祐子	4. 巻 16
2. 論文標題 『満洲国』の基督教伝道 日本人伝道者の自己像を再検討する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ビューリタニズム研究	6. 最初と最後の頁 31、39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 陳智衡 渡辺祐子訳	4. 巻 53号
2. 論文標題 香港の基督教の社会参与に関する研究 1841年から2019年まで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治学院大学基督教研究所紀要	6. 最初と最後の頁 155-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 王艾明 渡辺祐子訳	4. 巻 53号
2. 論文標題 市民社会と教会の伝統 中国の教会の喫緊の課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治学院大学基督教研究所紀要	6. 最初と最後の頁 267-279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 渡辺祐子	4. 巻 9
2. 論文標題 9「満洲国」における教会合同について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 富坂基督教センター	6. 最初と最後の頁 79、90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 渡辺祐子
2. 発表標題 関東大震災と在日中国人キリスト者たち
3. 学会等名 カルヴァン・改革派神学研究所公開セミナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 渡辺祐子
2. 発表標題 彼らはどう見られていたか 「満洲国」の日本人宣教師を例に
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡辺祐子
2. 発表標題 中華留日キリスト教青年会について Kautz Family Archivesを中心に
3. 学会等名 神奈川大学中国人留学生史研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺祐子
2. 発表標題 留日中国人学生伝道について YMCA Kautz Family Archivesを手掛かりに
3. 学会等名 アジアキリスト教交流史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺祐子
2. 発表標題 抵抗と妥協の間：宣教師が見た日本人牧師
3. 学会等名 上海大学 宗教と中国社会研究センター 国際学術会議 「グローバル化の視点から見た近代東アジア社会の変遷」（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 渡辺祐子（監修）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 かんよう出版	5. 総ページ数 254
3. 書名 増補版 はじめての中国キリスト教史	

1. 著者名 富坂キリスト教センター編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 274
3. 書名 協力と抵抗の内面史 戦時下を生きたキリスト者たちの研究	

1. 著者名 ミラ・ゾンターク編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 296
3. 書名 グローバル・ヒストリー の中のキリスト教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------